

# 作物生産農家の望むたい肥

財団法人 日本土壌協会専務理事 猪股 敏郎

たい肥の利用促進を図るためには品質の向上が重要である。これまでたい肥の品質向上というところから腐熟度の向上がとりあげられてきた。作物生産農家のたい肥の不満点として多く挙げられている変わった種子の雑草が増える、悪臭がするなどは発酵が不十分なことによるものである。

現在、たい肥の品質向上対策として多くの県でたい肥共励会を実施している。

こうした地道な努力のせいで最近、共励会に出品されるたい肥の品質は向上してきており、腐熟度の悪いたい肥が出品されることは少なくなった。

たい肥の品質審査は各県の審査基準に照らして行われるが、最近、利用する側の評価も重要ということで作物生産農家の代表を特別審査委員として審査に加える県が見られるようになった。

静岡県のたい肥共励会では茶、果樹、野菜、花き、水稲から各2名の生産者代表を特別審査委員に依頼している。こうした審査体制で審査を行っているが、審査基準で優良と認められたたい肥と作物生産農家が良好とするたい肥とが異なる場合が結構あるとのことであった。作物生産農家が良好とするたい肥は一般に土壌改良効果が高く、散布しやすい傾向のもだと言う。

つい最近、岡山県たい肥共励会を見学する機会があった。ここでも、静岡県の例にならって作物生産農家を特別審査委員にしている。出品たい肥は臭気、手触り、均質性、発芽率等の審査基準で審査されるが、H19年度の場合、最優秀のものと特別審査委員の評価の高いたい肥というものが異なっていた。3点の特別審査員賞を受賞したたい肥のサンプルや分析データを見ると、3点ともやや粗めで散布しやすいという特色があった。発芽率等は支障のない範囲ではあるがやや悪いものもありこうしたことから評点が下がったものと思われる。

この2県のように作物生産農家を審査委員に加

えていくことは、作物生産農家の望むたい肥とはどういうものかをつかむ意味で大変良いことだと思う。

たい肥利用の農家調査を行っている、「イチゴに豚ふんたい肥を施用したところ生育旺盛となり、花付きが悪くなった。イチゴやトマトには肥料成分が少なく土壌改良効果の高いたい肥が良い」という声を聞く。このように作物の種類によって作物生産農家のたい肥に対するニーズが異なる。

昨年度作物特性とたい肥の品質との関係を把握する目的で農林水産省の支援により特別栽培農家、有機栽培農家を対象に全国調査を行った。

全体としてたい肥の特性と言える土壌改良用途でたい肥を利用している農家が多く、今後のたい肥への期待も土壌改良効果が多かった。しかし、それを重視する程度は作物の種類により異なっていた。

特に果菜類（少肥を好む）（イチゴ、メロン、トマト等）が特に「土壌改良効果」を期待している。一方、葉菜類（多肥を好む）（キャベツ、白菜等）や果菜類（多肥を好む）（ピーマン、ナス等）については比較的たい肥に「肥料効果」も期待している。

たい肥の品質関係の主な項目としては「腐熟度が良いこと」以外に「土壌改良効果が大きいこと」、「肥料としての効果が大きいこと」、「取扱性が良いこと」などがあげられる。全ての項目を満足するたい肥を製造することはコスト、手間などから無理なので、主に利用する作物の特性に合わせたたい肥を供給していくことの方が現実的である。

このためには、当面たい肥共励会で各県の主要作物の生産農家の望むたい肥を把握することが重要である。その意味で生産農家代表全体が良いと評価するたい肥だけではなく、県内主要作物別に生産農家の評価の高いたい肥も表彰することも検討する価値があると思う。